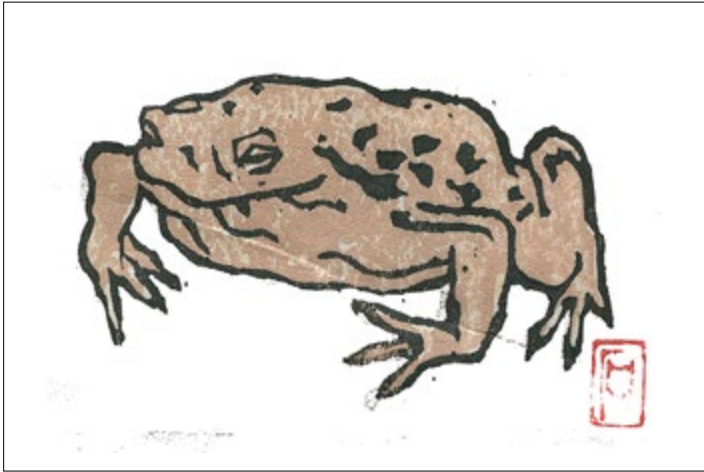


あを 4

2016





版画 武井石艸

姉妹の距離リングのように光る毛糸
たんぽぽ萌ゆ棲家は昼を灯したり
雁行くやレモン絞りの人差指

堀内一郎

下萌に素足未帰還兵の記事開く
冬の河新聞全紙かるがる越ゆ
子が泣きて闇にふかぶか穴を掘る

佐藤喜孝

(昭和47年3月 水音)

あを

四 月

路地あれば路地に川霧置き行灯
日の丸を父も持たざり春の風邪
二夜草きれいなことに泪して
八重紅梅碗の熱湯くるくると
家中にカナリアの聲春の雪

川霧

佐藤喜孝

☆

井上石動

雲湧いて瑞牆山や芽落葉松
初蝶の双つ蝶かな雛の日
をとめらへ風はいたづら青き踏む
闘うて生きて行かうぞ良寛忌
同行の靴へ手をやる遍路かな

とび梅や絵馬の数だけ夢のあり
何千の目が寄って来る白魚井
アネモネや窓に摺まり立ちの猫
裸木にそっと寄り添ふ常緑樹
一条の光りの下の初午祭

アネモネや

大日向幸江

☆

子 裕 藤 齊

添ひ寝の場猫に奪はれ春隣
「お騒がせしました」とまた豆を撒く
細氷や心を溶かす文届く
我意志で終の選択春告草
治療の道自分で決める梅の花

春の宵硯滴にある水沫みなわかな
背そひらより手を振る指および初詣
風邪の子の頬に人差指押して
暮れ泥む薄氷に捕まってる藻
夕焼背に帰るところへかへる寒鴉

および

佐藤恭子

早春

保吉 門衛 郎七

BVLGARIに戸惑ふバレンタインの日
女兒節句伯母のひいなも息をふく
風信子鉢から露地に又の年
草津の湯赤襟巻に硫黄華
春霞蓑に宿らず濡れ地藏

臍にひつつくスカート
蛸の池
菜の花に手を翳しけり
風やはし
信号無視を指摘されたり
柳の芽
暗がりに女人の気配
お水取
啓蟄や不忍池のねこ
爆睡

初夢

篠田純子

芽ぐむ

定梶じょう

片しぐれ浚渫船がぬれてゐる
なかんづく肉やの燈し雪ゆふべ
踏切に塞かるひとり雪女
水門の水位上がりぬ山雪解
何となくとは木々芽ぐむ頃のこと

やんはりど犬に愚痴言ふ春隣
寒椿夫より三步遅れけり
日脚伸ぶジムの窓よりさう思ふ
髪切つてチヨコ少しバレンタインの日
風光る東京マラソン笑顔満つ

風光る

須賀敏子

雪女

竹内弘子

枝川のしぶくと見しは小鰻刺
羽田沖くらし蝦蛄漁ひきつぎて
雪女うづくまるかに玉黄揚は
石に坐し何に思案の雪女
漱石忌かはたれどきの寒きこと

枯蓮の底ひにちらと芽ぐむもの
淋しめり老女にはこぬ風邪の神
折紙の百枚百色春立てり
そのことに触れてはならぬ春の霜
発酵を待つ句三つ四つ春立てり

立春

田中藤穂

追而書

中川句寿夫

水洩や門下と言ふもをこがましい
猫の子のぞろぞろ國勢調査かな
えんぶりや父は入り婿馬の役
言葉尻ひろはれて居る春の風邪
お水取りすぎたるあとの追而書

大寒の極まりし道皆そろり
窓に日の差し早春の息吹かな
堤防は早春の色ここかしこ
早春や渚静まり柔らかき
心地よきこの二三日梅ひらく

早春

長崎桂子

冬山路

森 理 和

薬袋三粒のこりて春の風邪
極寒を知ることなしに風柔く
冬山のおむすび絶品富士絶品
冬山路木漏れ日見上ぐ青深し
だあれにも話せぬ話冬山路

故郷に繋がる空や冬
冬の雨薔薇の蕾は果てにけり
窓際に蕾揺ぎて冴え返る
アネモネや紫の八重咲き初むる
幼子と図鑑ひらけり百千鳥

☆

山莊慶子

二月

赤座典子

幼子の虎刈り治む二月かな
牛車が不思議乗物好きの雛の客
配達車雪解雫の絶え間無く
薄氷や爪やはらかく病上り
三月の頬紅変へて病上り

立春や小学生の声通る
句集置き眠りつづける春の風邪
今し方光ありしを春の雨
きらきらと花巫女の列針供養
寿ぐ日ささげかかへし桜花

夢心地

秋川 泉



前月抄

湯ざましはひよわる水初雀 佐藤喜孝

老猫に命終迫る冬の雨 秋川 泉

世話やきの姉ちゃんに随きレンゲ摘 井上石動

強北風に顔真つ直ぐと友来る 大日向幸江

爪立ちて一番風呂に寒の入 斉藤裕子

霜柱胸の高さで手を振りて 佐藤恭子

初夢や子規漱石の門下生 七郎衛門吉保

家庭内にそれぞれ巣穴春を待つ 篠田純子



初日いま力かぎりに子のあくび

定梶じょう

真夜中のコンビニへ行く雪女郎

須賀敏子

思へらく賽の河原の路の臺

竹内弘子

探梅の先づお隣の白梅を

田中藤穂

衰へをおぎなふ氣力お正月

長崎桂子

電車の中を行ったり来たり冬の蠅

森理和

去年今年長湯も母に似てきたり

赤座典子

喜孝抄

いま



三月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

父の知らぬ家に暮らして粥柱

佐藤喜孝

お父上と暮らしていた家を、作者が建て直したのですが、新しい家には一緒に住んだことがないようです。前の家の台所はあそこで、居間は其処。と以前の家の間取を思い出しながら、七草粥を召し上がっています。先祖への感謝と、大黒柱である自身と家族の安泰を願っていらっしやると思いました。「家」と、粥柱の「柱」が響き合う一句と鑑賞いたしました。(純子)

木枯や夜更けに呼べば猫の鳴く

秋川 泉

夜更けに出掛ける家族に、声をかけているように思いました。「○○さん一気をつけてね。」ところが、作者の声に猫が反応します。鳴き声

は意外に近くて驚かされます。(純子)

野良めぐる本家の爺や水温む

井上石動

本家、分家の存在する土地に、少し腰の痛そうな長老が歩いています。見渡す限り一族の田畑です。代々の土地を守り、こうしていられることを感謝しつつ、今年の作柄も良かれと願っています。水温むの季語が効いていて、好きな一句でした。(純子)

春めくや臍のピアスの煌煌と

大日向幸江

新宿か渋谷あたりで、私も臍ピアスの若者を見た事があります。「煌煌」との表現に、上等ではない金属とか、若者の自己顕示欲が見えてきて、作者の視点に賛同しました。(純子)

爪立ちて一番風呂に寒の入

齊藤 裕子

まだ冷たい風呂場の床。一番風呂に入る作者の様子がよくわかります。「先に、入りなさい。」と労ってくださる、ご主人の声も感じられます。(純子)

純子さんは「爪立ちて」を「まだ冷たい風呂場の床」故と読まれた。「爪立つ」は足のつま先で立つことなのでその通りである。私はそこを熱い湯に入る足先の瞬間を捉へたと曲解させていた。寒の入の冷えたからだと湯もこなれぬ一番風呂へ入浴。足の先をそーっと入れる動作が的確に描がくことにより「一番風呂・寒の入」が働き、入浴のシーンがいきいきと伝はる。(喜孝)

霜柱胸の高さで手を振りて

佐藤 恭子

「いつてらっしゃい。」と作者は家族を送り出しています。胸の高さで手を振ること、「任せて。」とか「心配しないで。」の様なメッセーヂを送っているように思いました。(純子)

俳句作家、または俳人は俳句表現に常に迷ふ。明確に、はつきりと表現し伝へたいという要求がある。が、それにより詩的感動が薄らぐ、または俳句ではなくなってしまう結果になることがある。それではとその反対側に力が振れると、何を伝へたいのか伝はらず難解な俳句になってしまう。さうあつてはならずと推敲に励むことになる。掲句もどこか隔靴搔痒感がある。特に「胸の高さで」が句意を伝へるのに的確ではないやうである。「胸のところ」でもすれば見え

てくるか。「高さ」の「さ」は難しい。とマイナ
ス点を書いたが、純子評にもあるやうに採りあ
げたい魅力がある作品にかはりはない。(喜孝)

わらんべにとらす接待キャラ歌留多 七郎衛門吉保

接待ゴルフ、接待麻雀は昔、聞いた事があり
ました。しかし接待歌留多は初めてで、驚きま
した。アンパンマンの絵札には、大人は絶対手
を出してはいけません。(純子)

家庭内にそれぞれ巣穴春を待つ 篠田純子

人にはそれぞれパーソナル・スペースといふ
ものがあるといふ。人と人との距離のことで、
これ以上近づかれない、離れてゐたいとい
ふ感覚のこととある。心のパーソナル・スペー
スといふものではないか。家人の間でもパーソ
ナル・スペースはある。親子間でもパーソナル

・スペースがあるといふを再確認する作者。パー
ソナル・スペースを巣穴にたとへ詩的に表現さ
れた。「家庭内に」はすこし硬い。「家の中に」
くらいでいいかであらうか。(喜孝)

初日いま力かぎりに子のあくび 定梶じょう

この句は、平和な光景と思いました。いま、「保
育園落ちた。」のブログから、待機児童を持つ、
ママ達の抗議が盛んになっています。子どもを
抱いて、大臣に直訴している親達の光景と、対
比して鑑賞いたしました。(純子)

ポッキリと肋骨折れて小正月 須賀敏子

肋骨を折りながらも、小正月を祝っている作
者。小豆粥をたべたり、友人に愚痴つたり…。
骨折したのに悲愴を感じさせない、作者のし
たたかさが「ポッキリと」に現れています。(純子)

顔ふたつ川中島の飾り風

竹内 弘子

川中島をはさんで、信玄と謙信の大風が揚がっています。喧嘩風にでもなりそうな。豪快な句でありながら、顔、川、飾り、の三つのKのリズムが心地良く、繊細な作り方をも感じられる佳句と思いました。(純子)

葉牡丹の渦に日の差す閻魔寺

田中 藤穂

葉牡丹の渦に日が差している実景と、覗き込んでいる作者が見えてきました。閻魔寺でと言うことで、その渦はもしかしたら地獄の入り口かも？と、倒錯した感覚をも覚える一句でした。(純子)

慎ましく老いを装ふ初詣

長崎 桂子

作者の生き様を見せていただいたと、鑑賞いたしました。年齢相応に慎ましく装うことが、心静

まることなのでしょう。原色や光り物の装いが大好きな私も、見習うべきと思いました。(純子)

卓上で綿毛に変はる野辺の花

森 理和

野たんぽぽを想像しました。暖かい部屋で、つばみも咲き切って綿毛が飛び出しそうです。幸せな空間と、時間を感じました。(純子)

去年今年長湯も母に似てきたり

赤座 典子

電話口での典子さんのお母様は、元気なお声でした。十年前位だったでしょうか。電話を切るとき、「どうぞ、若い者達をよろしく願います。」と。

何かしら、母に似た所を自分に探す「母恋」に共感いたしました。(純子)

比来披見

ホトトギス 三月号

どことなくふくらんでぬし春の山 稲畑 汀子
蛇穴を出れば力道山の墓 稲畑 廣太郎

沖 三月号

秤初め離島行きなるゆうメール 能村 研三

雨月 三月号

妻の魂降り来か庭の寒あやめ 大橋 暁

槐 三月号

初手水手にぬくもりの湧いてきし 高橋 将夫

馬酔木 三月号

世を遠くして海鼠囓むうまかりき 徳田 千鶴子

風土 三月号

水音の奥へ奥へと探梅す 神蔵 器

京鹿子 三月号

異邦人あふれ餅花揺れどほし 鈴鹿 呂仁

六花 三月号

去りがたし雪田の鶴こぶの背中かな 山田 六甲



鳴 三月号

まつすぐの歩み梅林にふと消えし 井上 信子
歳晚を小病めばいよよ空青し 高橋 道子

空

伊藤通明先生逝去

強く在ることに疲れしシヨールかな 柴田 佐知子

万象 三月号

わが墓に南天の実の凍て付きぬ 大坪 景章

春燈 三月号

繭玉のしだれ豊かに揃ひけり 安立 公彦

峰 三月号

汚染の世復興の世の桜の世 布川 直幸

末黒野 三月号

笹鳴や幾代を継げる声ならむ 小川 玉泉

鎌倉は由比ヶ浜より時雨けり 松本 三千夫

やぶれ傘 八八号

冬深む隣りの椅子に匍置き 大崎 紀夫

比来披見

璦一六号

神さまは怖いやさしい寒椿

雲の峰 三月号

春宵や遺影相手の古酒盛り

萱
三月号

一杖に一步今年を減らしゆく

風景をいつかはみだす冬の蝶

松七日暈の部屋のやや暗く

零 三 月 号

神妙に湯に浸かる猿大日

明けの星辛夷の冬芽全て立ち

集
五
八
号

黒揚羽つれてくぐりし大鳥居

朝
三
月
号

春の湖見えざる雨のゆきわたり

火箱
ひろ

朝妻
力

木村 嘉男

龜田虎童子

小島 良子

松林 尚志

藤田 宏

大山 夏子

岡本 眸



(順不同)



毎月15日発売
定価 税別 1,000円

月刊

俳句界

2016年 5月号

特別付録

佐藤あかねの「アノミヅハ」

松本梢子（写真 黒沢寛）

《特別》 フォト俳句 を楽しむ

○フォト俳句講座（カハラ・クラシエと
エッセイの著者から、写真家、俳人による
フォト俳句のフォト俳句とは俳句の「一ツ
マル」と成り得るか？

森村誠一（写真家、俳人）
中村古陵（俳句フォトグラフィア）
石田郷子 田島和生 島井保和
神岡孝幸 鶴岡加南
キーンとビニー 俳句クラフターのすずめ
我井慎平（カメラマン、俳人）

さらに俳句界NOW 高崎公久

特別付録 兼さちか

田田喜貞 増城敏川 未知子
本庄レモン 星火園 原 朝子

特別付録 中田水光（漫画家）

※一冊定価は税別価格となります。

株式会社文学の森

03-6262-9193 FAX 03-6262-9196 URL <http://www.jungak.com>

俳境流連



にんげんに番号のあり獺祭

純子

ついに、マイナンバー制度が施行された。これには受け入れられないとする、考えの人も多々居るとのこと。マイナンバーを返しにいらつしやる方に対する対処方についても、区役所で研修があった。

世の中には、色々の考え方の人がいる。だから、法律を制定して、外れた場合は、裁くと言う事となる。個々の意見は聞いていられない。だって選挙で国民が選んだ人が、決めた事でしょう、と言われてしまう。

世界中に起きているテロ。直下型地震に火山の噴火。

安保法案可決による戦争参加。いつ我が身が、屍体になるかもしれない。その時、私に貼られた札に、「老女G-1」エエツ、マイナンバーじゃないの!?

口笛が今なら吹ける春の雲

じょう

ある時、「春の雲は自在でみる」という意の作品を会に出句して、「類句がある」と指摘されたことがあります。それが頭にみりたのでしよう、「春の雲は不可能を可能にするものだ」という、実に難しい句を作ろうとその頃努めていたのです。結局掲句程度の句におさまったのですが、しかし句帖を見ると、口笛の「口」を見せ消ちして「指」に直してあります。投句の時うつかり「口笛」と書いてしまったものであるらしい。口笛と指笛では句中どっただけ違うんだ、と問われると困るのですが、とも

かく口笛はかろうじて音だけは出ましたが指笛は、友人から真剣に教わりました。ほんとうに真剣に、です。しかし結局音にならなかつた。困惑した顔の友人を今でも思い出すのですが、春の雲の自在さを感じとる、現在でもそんな句を作つてみたい、思っているのです。さて……。

刑務所の門までの夏草の道

藤 穂

この句は“あを”には出していません。題詠しりず第三回「門」に出した句の一つです。「あれは何？何か面会か差し入れにでも行つた？」と二人の方から尋ねられましたので、ちよつと書いてみる氣になりました。

私が小学校一年位の時だつたと思うのですが、母に連れられて、母と私と弟の三人で甲府のある家へ伺つたのです。甲府は母の生い立ちの地ですし、母

の実家や親戚も何軒もあつたのでよく行つたのです。

その家は小母さんと女の子が二人いて、私より二つ、三つ年上の子と、私よりちよつと年下の子でした。上の子は元氣な活潑な子で「これからお父さんにお弁当届けにゆくので一緒に行こう。」というのです。その子と私とその子の妹と三人で母達に見送られて家を出ました。

甲府には監獄（刑務所）があつて、その家のお父さんは其処へお勤めしていたのです。彼女は無邪氣に「うちのお父さん監獄に居るんだよ。」というのですが、私の母が「うちのお父さん監獄に居ると言わないで、お父さん監獄にお勤めしてるつて言いなさい」と教えるのですが、その子は一向おかまいなしで、又「うちのお父さん監獄に居るの。」というので、その都度私の母に同じ事を云われるのがおかしかつた。

あれは夏だつたのだ。私達三人は夏のワンピース

を着て鍔広の帽子をかぶっていた。家を出て少し行くと広い草の原に出た。女の子についてどんどん行くと草つ原の彼方に高い塀が見えた。子供心にもそれは荒涼とした景色だった。でもその子は元氣よく明かるく何か喋ったりしながらやがてその塀に到着した。

高い塀の一部に門があり、その脇に小窓があつて、その中に小父さんがいた。その子は馴れた手つきで「お父さんのお弁当」と言つて小さな風呂敷包を渡したら「ご苦労さん。」と向うも慣れた笑顔で受け取つて、私達は踵を返して今来た道を戻り家へ歸つた。

その家へ行つたのはその時が一度、どういう知り合ひだったのか、今となつてはもうわからない。

けれど、幼年時代の記憶の中に、あの草原をゆく私達三人の姿と、向こうに見えた高い塀、あの小窓と小父さんが鮮明に浮かんでくるのです。今は刑務所と名が変りましたが、あの頃は監獄といつて行つ

ていたので、この句も本当は「監獄の」と直した方がよいかも知れません。監獄の中には出所後のために仕事を身につけさせる場所などもあり、印刷所などある所もあり、出版する時一般より安く作つてくれるなどきいています。

遠い遠い幼年時の記憶ですが何故か鮮明に残っている不思議な光景なのです。

暑きミャンマー日本の文字の慰霊塔 喜 孝

ミャンマーがまだ軍政を敷いてゐたころ訪れたことがあつた。下調べもせず人に蹤いていつたので行く先々で感動の連続であつた。そんな異国の風光に心奪はれてゐたわたしの眼前に掲句のごとく漢字と平仮名が彫られた大きな日本兵の慰霊碑に出会つた。戦後にタイムスリップしたのかと思ひつつミャンマーの町や人を見てゐたところバーンと現実に

どされたおもひがした。

その辺りは木陰も多く掃除も行届いてゐてほつとした。句中の「暑き」は心の暑さかも知れない。拙いが書残しておきたかつた。

荒野原柚子の実二つ木の低く
寂として野中に白き帰り花
桂 子

私の住所の鉄道の駅は「富田」です。西に横たわる鈴鹿山脈に向い其の麓の町の西藤原町までを、三岐鉄道が走っております。其の鉄道の三つ目の駅で降りた日の事です。

此の駅は昭和二十年、桑名市、四日市旧市街が夜の襲空により焼失したので、父の意見に従い、旧制女学校一年生の私は弟妹達と夕飯をすますと、三岐鉄道に乗り、お借りしてある農家の離れ座敷の一部屋へ毎晩通い、翌日は大混雑で電車は乗れないので、

早朝に励ましあいながら、歩いて家に帰る生活が、敗戦まで三ヶ月間余続いた記憶が幽かにある場所です。

思い立った日は風も弱く穏やかな日でした。降りた其の村は、寂れた感じでなかなか人に会うこともなく七、八分歩いたら荒れた広場に出ました。其処は一面の枯色で、草の丈も一メートル余はあつたでしょう。其の中に太くてがっしりした丈は二メートル程の木に、これまた大きな柚子の実が二つ成っていました。

少し離れた所には、大きな白い百合の花が四、五本咲き其の根元に可愛い淡いピンクの花が咲いた。美しい一角がありました。

物音一つせず静かなこの場所も今、日が傾きかけて西北の風が吹き始め、肌寒くなんとなく少しばかり恐怖を感じて足早に駅への道を急ぎました。

青天に柘榴。ぼたりと絵具垂れ

吉 保

私の住む清瀬市は、東京都から兎の耳のように北側に突き出て、埼玉県の新座市と所沢市に接している。市の面積に占める「みどり率」は40%を超え、更にその半分が農地として活用されている。

人参などの野菜作りとともに植木植栽などの園芸も盛んで、一時間も散歩をすると数軒の園芸農家を見ることが出来る。

多様な植木の中でも柘榴の存在は一段と際立っている。真夏の太陽のもとで、五メートルを超える高さ、真っ赤な大きな実を付けている姿は印象深い。

四半世紀前の家建て替えと同時に、その印象深い柘榴は狭い我が家の庭に鎮座した。柘榴は成長力が強く、あちこちから新芽が出たり、強力な長い棘を持っていたり、葉は病虫害に弱い等それなりの手入れが必要となる。同時に成長力のお蔭で、肥料なしでも毎年立派な実を多く付ける。

その色は二十数年前の印象と全く変わりなく、毎年楽しむことができ、昨年は表題の句となって結実した。

有能な主婦になりけり年の暮

裕 子

12月の声を聞くと、とても気忙しくなる。まずは大掃除。窓ふきに始まり、換気扇や普段行き届かない所の片付けもの。お墓の掃除、正月用品の買い物。早く送ってしまった良かったお歳暮。一応やらなきやと思うクリスマス。年の暮になり、お餅を搗いたり、おせち料理も自分で作り、一通りお正月の準備ができると、12月は何とてきばき良く働いたのだらうと感心してしまう自分がいる。年の暮だけではなく、普段からこれくらいてきばき働けば、本当に有能な主婦になれたのだらうに、毎年有能な主婦になるのは年の暮だけという生活を続けてきてしまった。反省する事頻りである。

はしたて集

定梶じょう選

大日向幸江

芽起しか顔打つ雨の生温く
牡丹の芽触れてみたがるツアー客
半分つ焼きたてだよと焼芋を
叔母白寿渡してくれし梅の花
田も畑も光あふるる霜の朝

芽起しか顔打つ雨の生温く

上五、疑念の助詞「か」が効いています。しかし、坐五「生温く」の措辞がいささかぬるい。季重なりを覚悟で



芽起しか顔打って雨あたたかし

牡丹の芽触れてみたがるツアー客

安住敦に

誰が触れることも宥さず牡丹の芽

があります。幸江さんは「触れてみたがる」と書き、安住敦は「触れることも宥さず」としている。牡丹の芽にはそういう処があるのでしょう。でも、「ツアー客」は詩の語としては叶うていない、と思います。坐五に据えることが適うていないのです。

ツアー客触れてみたがる牡丹の芽

なら形が少し整うのでは？

半分つ焼きたてだよと焼芋を

この句も同様です。助詞「を」で句を留めるのは難しい。

焼芋や焼きたてだよと半分つ

「半分つ」が私にはとても出てこない措辞。面白い。

叔母白寿渡してくれし梅の花

この句も同じ。「叔母白寿」を主役に据うべき。

梅の花渡してくれて叔母白寿

田も畑も光あふるる霜の朝



先ず「霜の朝」の措辞。田畑の光あふれるのは霜の朝だから、では当り前。そして「田も畑も」も安易な言いまわし。一つをずらして

田も野路も光あふるる霜の花

散文の語序で句を作ること、凡の極み、ということですよ。

田中藤穂

子ら遠し廊下に増やす室の花

春の塔水煙に雲触れんとす

雨水今日ふくらんでゐる飛鳥山

春の雲家解体の音ひびく

春めくや電線工事の人見上げ

子ら遠し廊下に増やす室の花

中七「増やす」は、自動詞「増ゆる」にした方が落ちつきます。

子ら遠し廊下に増ゆる室の花

春の塔水煙に雲触れんとす

面白い処を捉えています。「触れんとす」ときっぱり言い切つて。

雨水今日ふくらんでゐる飛鳥山



大きな景をとらえて、佳句。

春めくや電線工事の人見上げ

これもいい処を捉えています。ですが「電線工事の人」が緩い。

春めくや電気工夫を仰ぐ時

「工夫」の語を、もしかしたら藤穂さん、避けたのかもしれませんが。

斉藤裕子

萎ゆる気を仕切り直すや春隣

咳激し胃の腑が喉へ裏返る

データより触れて診て欲し雪女郎

言の葉や尽せば通ず梅の花

萎ゆる気を仕切り直すや春隣

「春隣」が坐っています。「仕切り直す」と、現つのこと、とするよりも

萎ゆる気を仕切り直さん春隣

とした方が。

咳激し胃の腑が喉へ裏返る

咳き込めば確かに苦しいが、「胃の腑が喉へ」の措辞が少しオーバーヒート気味。



咳地獄といふべし胃の脇裏返る

データより触れて診て欲し雪女郎

モニターばかり見ていないで、触診も、ということなのでしょう。その相手が「雪女郎」とは驚きました。しかし、いささか飛躍しすぎかと。〈雪女郎医院の前で考える〉程度に予先を緩めた方が宜しいか、と。

言の葉や尽せば通ず梅の花

「梅の花を西行忌に、とも考えたが、」とおハガキにありました。「言の葉」は、古くは「ことば」を意味するとともに和歌も「ことのは」と言ったようですから、「西行忌」で充分通ずるわけですが、俳句を季節の詩である、と信じて疑わない俳人が大勢いて、忌日には季感がともなわない、ということから嫌う人がやつぱりいるわけです。陰暦三月十六日がその忌日ですけど、「西行忌」から季節を感じとること難しい。殆んどの忌日はそうなのです。

芥川龍之介 大暑かな

久保田万太郎

万愚節半日あまし三鬼逝く

石田 波郷

これらの秀句は、その死を悼んでも忌の句とはいえませんが、概ね忌日の句を避ける方が正しい、そう信じている人が少なくない数あるわけです。でも、です。「物」をとり合わせることで忌の句は充分に鑑賞に堪え得る筈です。



花あれば西行の日とおもふべし 角川 源義

口で紐解けば日暮や西行忌 藤田 湘子

特に湘子の句は、陰暦三月半ばの季節感を教えてくれるものではありませんが、「なんかよう分からんけど、西行忌の日暮れってこんななんだろうなあ」とむかし友人が言ったのを今でも記憶しているのです。

さてそこで裕子さんの句に返って、〈言の葉や尽せば通ず西行忌〉と据えてみます。私は佳句、と思いますけど、季節は確かにない。一方〈言の葉や尽せば通ず梅の花〉。ことば、あるいは和歌は「尽せば通ず」るものであり、「梅の花」を置くことで色、匂い、そして早春の季感まで感じとる。「梅の花」と据えて正解、とする人が多いかもしれません。私個人はしかし西行忌を佳しとしたいのです。

結局裕子さんの好みに委すべき、と。

森 直子

紅梅や青銅の馬宙を搔き

窓側の肩の冷えくる紅茶かな

風邪癒えて日ざしの背を押されゆく

次の日の朝な夕なのおでんかな



紅梅や青銅の馬宙を掻き

青銅の馬に取り合わせるに梅。めりはり。

窓側の肩の冷えくる紅茶かな

「紅茶」が読みてにもあつたかい。

風邪癒えて日ざしの背を押されゆく

動詞を一つ減らし、「押されゆく」の措辞も何とかしたい。

風邪平癒日ざしが背中押しにけり

須賀敏子

こだはりのパン屋へ向かふ朝うらら

囀りや青年バイクぴかぴかに

佇めば鯉ゆうらりと暮れかぬる

山茱萸の咲いて思はずひとりごと

囀りや青年バイクぴかぴかに

「ぴかぴかに」は詩語として不用意。素直に「磨きあぐ」とした方が。

佇めば鯉ゆうらりと暮れかぬる

「鯉ゆうらり、が面白い。ただ、上五が動詞、坐五が動詞の場合どちらかを変える、



という工夫はしてもいい。

佇めば鯉ゆうらりと夕永し

山茱萸の咲いて思はずひとりごと

「咲いて」を名詞にして、坐五を動詞にする。めりはりが出ると思います。

山茱萸の花や思はずひとりごと

秋川 泉

春の風邪タベは何を食べたっけ

猫呼んでさがす闇夜は梅の香に

春靴とび出ししもの白小犬

亀なくや古書店通ひ昨日今日

春の風邪タベは何を食べたっけ

ある歳時記に、「冬に猛威をふるう風邪に比べ、春のそれはどこことなくのどかだ」と説明してあつて、春風邪まつさい中の友人、大変立腹したことがありました。とは言え、泉さんの春風邪も重篤なものではないことは、中七以下の措辞でわかります、私なんぞは風邪引きじやなくとも忘れる。

猫呼んでさがす闇夜は梅の香に



坐五の「梅の香に」が落ちつかない。「呼んでさがす」の動詞の連続も句をゆるくしている。

猫の名を呼ぶや梅の香闇にあり

春 鞆とび出ししもの白小犬

「春鞆」は窮屈。字余りでも「春の鞆」と。

亀なくや古書店通ひ昨日今日

「昨日今日」は出来合い、既成のことば。結句に据えると句が不安定になります。

昨日今日古書店通ひ亀鳴ける

おハガキに、考えすぎるのかよく分らなくなってヘンテコな句になった、とお書きになっていらつしやる。それで宜しいのです。入門書を読んで俳句がいつぺんに上手になった人はひとりもない、のが定説です。時間をかけることでしか上達する方法がないわけです。

赤座典子

春霞飛行機雲の筋交ひに

淡雪のひらひら鯉の頭まで

雪解晴更地の黒の深まりぬ

駐車場に小さきかまくら丸ポスト

春霞越後の締めは塩にぎり



淡雪のひらひら鯉の頭まで
私なら「鯉の頭かな」としたい。

春霽越後の締めは塩にぎり

「締めは」の助詞「は」の使用は、句や歌では、重いことば、とされていて、嫌う俳人がやっぱりいるのです。

春霽越後の締めの塩にぎり

雪解晴更地の黒の深まりぬ

「雪解晴」の遣いようが目新しい。中七、「更地の黒の」は「黒さ」と強調したい。

雪解晴更地の黒さ深まりぬ

駐車場に小さきかまくら丸ポスト

坐五「丸ポスト」は「小さきかまくら」を形容したものでしょう。でも即した言い方、とは思えません。少々形容がはずれても、

駐車場に小さきかまくらポストのやう

粗てこの三月号、典子さんの

雷門世界に冠たる冬着満つ

の句。この度のおハガキで、ユニクロのダウンのつもりで作ったのだがどうだろう、と書いていらつしやる。そして「世界中の人がユニクロを着ているようです」と書き添えてありました。



ひとことで申し上げますと、無理です。雷門からユニクロを連想すること、例えその近辺にあることが名だたることとしても無理ですし、あるいは「ユニクロ」が「世界に冠たる」店舗だとしてもその店に「冬着が満」ちているとしても、いわば一般的ではないのです。詩歌特に短い詩形俳句は、過不足なく表現することの困難さを初心者から五〇年六〇年の経験者に至るまでお互い身につまされながら励んでいるわけで、典子さんの言も充分理解しながら、やっぱり無理である、と。

七郎衛門吉保

姿勢よく藤沢周平寒梅忌

街中に眠れぬ夜や傾れ雪

受験生開門待つ間の足踏み

春の雨濡れて行かふは昔々

姿勢よく藤沢周平寒梅忌

先月メめの吉保さんに「寒梅忌」の句がありました。「藤原周平」のことに疎い私には、いま一つ掴みかねる処があつたのですが、今度の句ではつきり理解できました。

裕子さんの項でも触れましたけれど、「周平忌」なら殆んど季感がないわけです。因みに、藤沢周平ファンに調べてもらつたら、一月二六日に亡くなっています。まさ



に寒中。

街中に眠れぬ夜や傾れ雪

「街中」は、「街なか」でしょうか「街ぢゆう」でしょうか。意味内容が少し違ってきますが、いずれにしても「街中に」が説明くさい。しづり雪を屋根からのものとして

屋根屋根や眠れぬ夜の傾れ雪

受験生開門待つ間の足踏み

中七から結句にかけての破調が私好みなんです。破調は、どうしても直せない場合にのみ遣うべき、というのが凡その約束。

受験生開門を待つ足路みし

春の雨濡れて行かふは昔々

中七結びの「は」。これも避けた方が宜しいかと。あわてて言い添えますが、私個人は「は」の使用を少しも嫌っていません。句会を渡りありくうちにそうなった、ということ。

春雨や濡れていかうと昔々

黒澤佳子

牡蠣フライ幾度も揚げぬ当り年

土鍋煮の大根飴色蓋取れば



掘炬燵かくれ遊びと決める子よ
茶を注文箱の隅なり柚羊羹

牡蠣フライ幾度も揚げぬ当り年

「幾度も」は、一つを二度、三度揚げた、とられかねない。

牡蠣フライ幾つも揚げぬ当り年

掘炬燵かくれ遊びと決める子よ

子供達がかくれんぼをすること「掘炬燵」だから、なんでしょうが、やっぱり「炬燵を開いたら」の意を添えたい。

炬燵開きかくれ遊びと決める子よ

茶を注文箱の隅なり柚羊羹

「注文」とあればお茶屋か茶農家。どういう関係に柚羊羹はあるのでしょうか。
茶をもらひ箱の隅なる柚羊羹

森 理 和

誕生日二十本の黄水仙
チョコレート買ひに出掛ける三月かな
ひよろひよろの園児の蚕豆花二輪



青木の実バッグの底に五円玉

ひよろひよろの園児の蚕豆花二輪

園児の植えたものだからひよろひよろであり、花も二輪だけである、と因果を説明しているような。

蚕豆の花の二輪は園児植う

長崎桂子

冬耕の後を漁る鴉かな

冬河口鳥たち喧嘩水けむり

輝の手を抱く夕べや救急絆

雨戸あけ雪国の景たっぷりと

冬耕の後を漁る鴉かな

「漁る」は水に関わる言葉。

冬耕の何時き鴉あとに蹤く

冬河口鳥たち喧嘩水けむり

先の「春鵜」と同じく「冬河口」はことばを窮屈にしています。あるいは坐五に「水



けむり」を据えることで頭でつかちの句になっている。

水けむり鳥たち喧嘩冬の河口

輝の手を抱く夕べや救急絆

いつ頃の句会でしたろう、「救急絆」が正規のことばなのか約されたことばなのか、話題にのぼったことがありました。音に不注意な私は、どちらでもよろしいのに、と思っただけを今思い出しています。

雨戸あけ雪国の景たつぷりと

「たつぷりと」がやや手あかの付いた言いよう。せめて中七にとりこんで和らげたい。

雪国の景がたつぷり雨戸あけ

佐藤恭子

大晦日訛る鴉のかへり来る

山茶花の飛英追ひかけ子と婆と

阿吶の虎丈余のしっぽ春の雪

地団駄を踏みて雪降るおもてへと

山茶花の飛英追ひかけ子と婆と

山茶花は、ツバキ科でありながら花びらで散ることを知ったのはそんな昔ではな



かったのです。しかも、知人宅の山茶花を永く見ているのに、です。ある友人にいわせると、私は花のオンチであるらしい。

阿吽の虎丈余のしっぽ春の雪

狛犬の類いと理解しましたけれど、ならば珍しい。そして、近隣にある一対の像がどんなしつ尾を持っていたか、今屈託しています。

地団駄を踏みて雪降るおもてへと

憤慨することがあつて雪ふる表へ子が出ていった、と。恭子さんにしてはやや凡。加倉井秋をに

河に降る雪があきらめきって降る
があります。

雪のふる様子を「地団駄ふむ」と譬えたら、面白くなりそう、と思うので玄へ地団駄を踏むさまに、誰もいない広場に雪がなどと。よかつたら考えてみて下さい。

中川句寿夫

電気屋が来て春昼の仏の間

海鼠に酢効かせ誰にも言へぬこと

同い年位の男冬帽子

啓蟄やそこを動かぬ台秤



麦踏みし日の寝ねがての貼り薬

電気屋が来て春昼の仏の間

平生の仏間は、用事ある時以外ひとの入ることがない。入っても身内の他は坊さんだけ。そこへ已むを得ず電気やさんを入れた。その違和感も、春の昼となればなおさら。

海鼠に酔効かせ誰にも言へぬこと

男子は一般に酔に弱い、といえます。しかし酔を好む作者は海鼠に酔をたっぷり効かせた。その方がむしろ男性的でしょう。そんな作者にも密かごとが。

同じ年位の男冬帽子

男性でもやっぱり同性の身につけるものには気がかかるのです。まして同じ年ぐらい、とあれば一層。

佐藤喜孝

春まけてくれなゐの香に萌黄の香
目をつむる体のどこか点灯す
十七のころの触角薔薇の芽
女の触角男の触覚春うごく
べちゃべちゃと引きどきの鴨水噛める



春まけてくれなゐの香に萌黄の香

「香」は現在、「匂い」の意味でしか遣いませんけど原義は「色彩」について遣ったことにあるようです。喜孝さんの句の「香」も然うでしょう。春になって、「くれなゐの色」「萌木色」がよく映える、と。

目をつむる体のどこか点灯す

上五を終止形で留めている。結句も言いきって。否、「目をつむる」が「体」にかかっていてもいい。とにかくこの句には「放下」の匂いがする。だからこそ「点灯す」の措辞が生きてくるのです。

十七のころの触角薔薇の芽

なんとも微妙な感覚をともなつた句。触角は昆虫等の感覚、臭覚を司る役目を果たすそうですが、少年期から青年期にかけての人は殊に感覚が

敏感。それが「十七のころの触角」でしょう。そして「薔薇の芽」は、種類で色が違うわけですけど、やっぱりその色は微妙。上句と下句は全く違ったことを言いながら、あたかも一本造りのようにばらばらにできない。おおよそ喜孝さんの句はそうなのです。例えばどんな飛躍した取り合わせでも、混然一体。以下の句でも同様なのです。

女の触角男の触角春うごく

べちゃべちゃと引きどきの鴨水噛める



題詠シリーズ

(2015 年既刊)

初橋立聖隅古石
茜渡ち人田地橋
：る漕と川図の
：：ぎ：：で：
：：て：：は：
：：：：：：
：：：：：：
：：：：：：
佐佐篠赤篠田斧
藤藤田座田中田
喜恭純典大藤綾
孝子子子佳穂子



去年の雨：：：：：
キラキラと：：：：
啓蟄や：：：：
塩辛の：：：：
ダウンスト：：：
蜂の翅：：：
春雨じゃ：：：
老兵の：：：
：：：七郎
：：：篠田大佳
：：：衛門吉保
：：：斧田綾子
：：：篠田純子
：：：佐藤喜孝
：：：赤座典子
：：：田中藤穂
：：：佐藤恭子

昨夜の雨：：：：
門といふ：：：
初詣：：：
納骨堂：：
三三五五：
門松や：
門松に：
朝曇：
：：七郎
：：衛門吉保
：：篠田大佳
：：佐藤喜孝
：：赤座典子
：：斧田綾子
：：田中藤穂
：：篠田純子
：：佐藤恭子



あをキーワード俳句辞典（ここーこせ）

古今

緑濃し古今の墓を抱く寺

鎌倉喜久恵

小鷺

冬の水こゆるぎもせず小鷺立つ

早崎 泰江

古刹

雪解光古刹の笥あふれぬる

長崎 桂子

小雨

大雪にならず小雨の夕暮るる

河合 笑子

小雨降る人の籬に冬小菊

関口 ゆき

五月富士見えぬ小雨のラウンジや

田中 藤穂

小雨降りあたり静かに冬深む

芝宮須磨子

西空に虹かかりゐて小雨かな

長崎 桂子

美しき小雨の色や嬌柳

王 岩

小雨のち曇りのち晴運動会

須賀 敏子

腰

渡されし踊団扇を腰に差す

栢森 定男

玉の汗首筋背中腰は帯

東 亜 未

ふる里の紫雲英畑に腰うづめ

鈴木多枝子

腰落し一滴づつの清水受く

後藤 志づ

棧細き腰高の窓小鳥来る

篠田 純子

干魚におよび腰なる鳥の子

関口 ゆき

息白し坂登る手は腰へ組む

渡邊 友七

お日様が山に腰かけ刈田道

芝宮須磨子

きさらぎや騙しだまされ膝と腰

吉弘 恭子

廃校のさくら腰でも下ろさうか

篠田 純子

椿壽忌の腰を下ろすと石の冷え

佐藤 喜孝

蟻の道踏み揺るる予後の腰

渡邊 友七

細腰の浴衣の帯は貝の口

芝 尚子

御田植祭少女の腰のさだまらず

長崎 桂子

冬の汗足腰達者にみかん畑

藤野 寿子

曲る腰伸ばしつ媼豆ご飯

森 理和

五月憂し腰につけたる万歩計

早崎 泰江

自転車に乗って腰浮く暑さかな

井上 石動

土管あり枯るる野を来て腰下ろす

定梶じょう

濃し

夕日濃し赤松唐松盆おどり

東 亜 未

罌粟の花透けてまた濃しひと日かな

吉弘 恭子

秋茄子の徒花ゆゑか色の濃し

関口 ゆき

白檜曾や螢袋の色の濃し

芝 尚子

川の面被ふがごとく緑濃し

吉成美代子

人の影大霜へ濃し晩年か

定梶 じょう

雲に入り霧を出て濃し草もみぢ

堀内 一郎

秋日濃しすだれの筋の移りけり

鎌倉喜久恵

みかん畑継ぐ農大出陽ざし濃し

藤野 寿子

泰山木江戸の天麩羅味の濃し

田中 藤穂

医者入門ことさら額の花の濃し

芝宮須磨子

緑濃し単線軌道鳥の立つ

森 理和

来し方

来し方を語りつくせぬ春の宵

芝宮須磨子

来し方を飛び石として冬深く

堀内 一郎

長屋門来し方思ひ緑なす

大日向幸江

越路

栗をむく越路吹雪を聴きながら

田中 藤穂

越の国

右手に海左手に稲穂越の国

佐藤 恭子

鳥渡る越の国原散居村

定梶 じょう

コシヒカリ

新米や朱鷺舞ふ里のコシヒカリ

木村茂登子

古酒

白雪夜ひとりが上上古酒を酌む

吉弘 恭子

土室にひんやりと古酒置いてあり

竹内 弘子

新酒古酒夫の秘蔵は蜂焼酎

東 亜 未

寡黙なる縁戚に古酒携へて

赤座 典子

古書

短日や十把一絡げの古書市

竹内 弘子

六月の夕焼け古書を買うて出て

定梶 じょう

故障

電気設備故障困惑去年今年

長崎 桂子

古戦場

古戦場越えて行き着く菖蒲園

須賀 敏子

春の日に

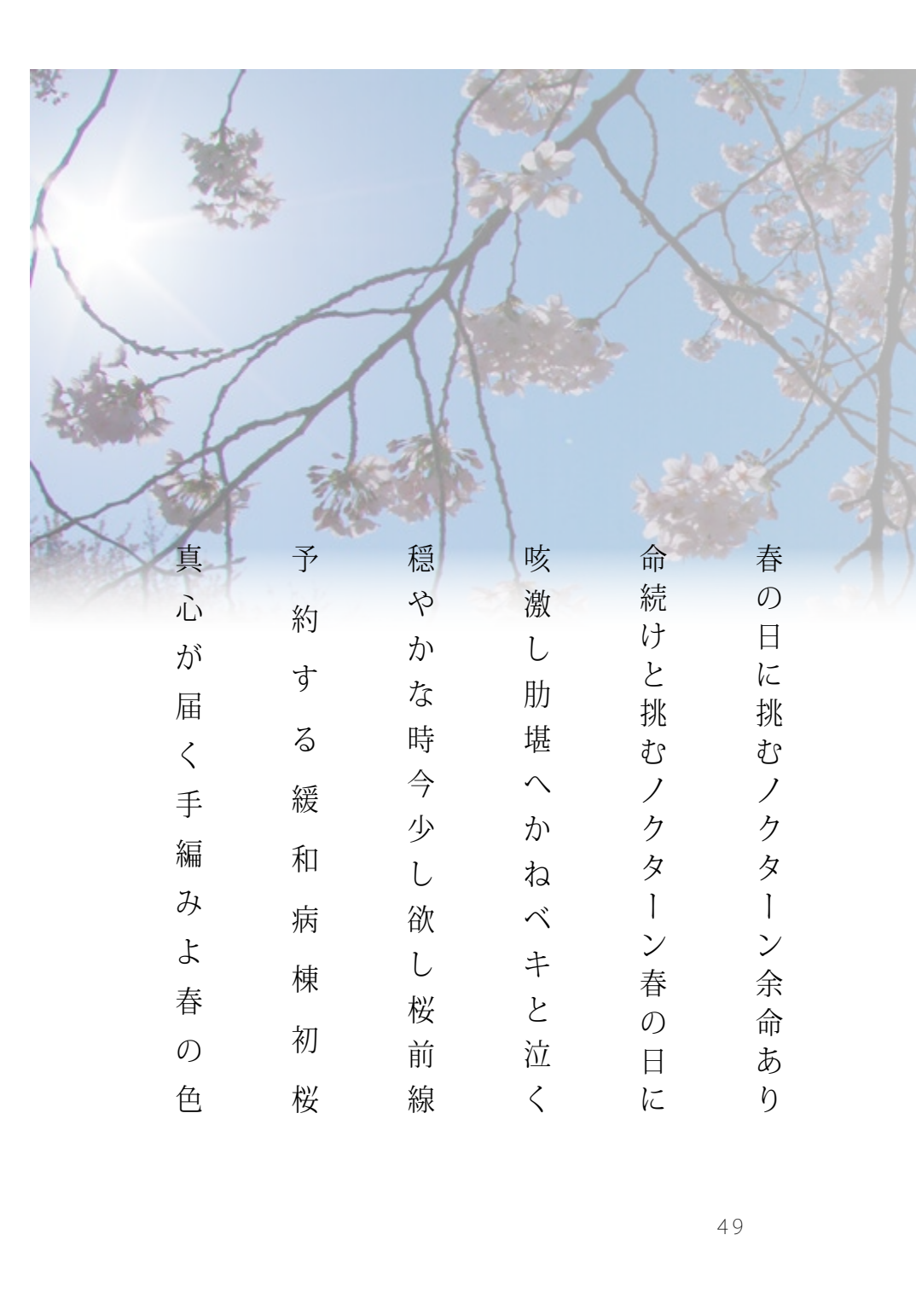
齊藤裕子

差し引いても幸せ勝る堇草

猫撫でて我身慰む日永かな

猫撫でて窓いつぱいの春日かな

みやあごみやごあんあんと恋の猫



春の日に挑むノクターン余命あり
命続けと挑むノクターン春の日に
咳激し肋堪へかねベキと泣く
穏やかな時今少し欲し桜前線
予約する緩和病棟初桜
真心が届く手編みよ春の色

あとがき

題詠シリーズと称し希望者で数ヶ月かけて30句作つてゐる。デドックスといふ意味の分らないコトバを句会で知った。しらべると、体内に溜まつた毒物を排出させることである」とある。

このシリーズは参加者の限定本なので、普段控えめにしてゐる「やかなけり」をふんだんに使い日頃の鬱憤をはらしてゐる。「釣瓶落し」といふ嫌いな季語などもわざと使つてみる。ルビを振らなければ解らない摩訶不思議な言葉も探し出して使ふ。マンネリ、繰返しなど怖れはしない。終ると誠にすつきりする。このシリーズにはもしかしたらデドックス効果があるかも知れない。おゆるしを得て「橋」より一句つつ。

橋くぐるつばさを開き夏の鴨

綾子

白シャツの父が先頭丸木橋

藤穂

夕立や道路の下の日本橋

大佳

数寄屋橋小さき碑となり柳蔭

典子

スカイツリー涼し永代橋と同じあを

純子

番傘の露をはらみて橋の上

恭子

初茜東京灣を橋がゆく

喜孝

次回は「糸」です。締切五月末。

〈喜孝〉

二〇一六年四月号

発行日

四月一日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・9828・4244

ファックス

03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・ティリエイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替

00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。

